

在宅筋萎縮性側索硬化症療養者支援に参加する 学生の態度行動分析

清水 裕子 (医学部教授)

上原 星奈 (医学部助教)

川上 聖加 (医学系研究科看護学専攻大学院生)

1. はじめに

医学部開設科目のうち、看護学科全学年を対象とした自由科目「ボランティア活動」は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災の後、国内外の多くの人々が被災者支援のために活動し、その成果が教育活動に資するものであることから、その教育効果を期待して開設された。

そもそもボランティア (Volunteer) とは、自発的な仕事という意味の *volunt* に従事する人を意味する *eer* が合成された言葉であり、「無償奉仕者」を意味するとジーニアス英和辞典には説明されている (南出編、2018、2332-2333 頁)。また、ラテン語の *voluntas* (自由意志) や *voluntarius* (自ら進んでする) などに由来するとされている。フランス語では *volonte* (喜びの精神)、英語では「自発性に裏づけられた奉仕者・篤志家」となっている。つまり、無償の行為のみならず、自由意思による活動や篤志家への対価が支払われることもある。わが国では1960年代に入ってから、英語が意味する用語が普及し始め今日に至っている (和田・南他、2010、2715 頁)。日本語の「奉仕」は、日本では、神仏・天子・主君・師などにつつましんでつかえることや、私心をすてて国家・社会や他人のために献身的に働くこと、自己をすてて尽くすことと説明されている (佐藤、2001、1404 頁)。歴史的には、1938年に制定された国家総動員法による「学徒勤労働員」や、戦場に赴く「学徒動員」による強制された「奉仕」は、けっして繰り返してはならない教訓である (独立行政法人国立青少年教育振興機構、2020)。英語のボランティアは、自発的であるという意味であるが、日本語の奉仕は、献身となって、社会や外部からの要請に応答する行為であることも含まれるといえる。よって、科目開設にあたり、ボランティアの言葉をそのまま活用した。

また、ボランティア活動 (Volunteer work) とは、「自発的意志によって、無報酬で行う社会福祉活動のことを、わが国では主として指している。英米では各種の民間団体の活動を、自主的な運動という意味でこう呼んでおり、日本でも近年は、社会福祉分野以外の市民運動や住民運動、個人の活動に用いる場合もある。」 (小倉、2013、2041 頁) とされる。このボランティア活動が大学において意識化されたのは、災害との関連からであった。1923年、関東大震災の際、青年団とともに被災者の救援活動にあたった東京帝国大学他の学生の行動や、大正デモクラシーを背景に全国に広がった学生セツルメントの活動が史実

として物語っている。このような大災害は若者たちの「ボランティア衝動」を覚醒させるもので、近年では、1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災であった。「大学生のボランティア活動等に関する調査」では、ボランティア活動・社会貢献活動に参加している学生ほど、〈へこたれない力〉〈意欲〉〈コミュニケーション力〉〈自己肯定感〉といった、「社会を生き抜く資質・能力」が高い傾向が見られたと報告されている（独立行政法人国立青少年教育振興機構、2020）。

一方で大学生は社会人としての準備教育の期間でもある。暉峻（2012、67頁）は、「ボランティア活動は、自分たちの社会は自分たちでつくるという、市民としての自立性を意識化するための一歩である。その一方で、市場・競争・管理社会の原理から脱出して、自己肯定感を育み、自分らしさを再発見し、自分と社会とのかかわりを再認識するための有効な自己実現の手段でもある」と述べ、ボランティア活動の「相互行為」が社会集団の対立と分断を超え、世代間の相互理解と対話をすすめ、学生の新たな可能性を再発見することが期待できるといえる。

平成15年度文部科学省委託調査「奉仕活動・体験活動の推進方策等に関する調査研究」における、ボランティア活動を推進する社会的気運醸成に関する調査研究報告書によれば、若年者のボランティアへの行動者率が低いのは、地域との関わりの希薄さから、地域活動に関する行動者率が低いことが原因であり、必ずしも意識が低いわけではなかった。さらに、地域社会との関わりの希薄な若年層、希薄な住民が多い都市部において、情報をどのように発信していくか、また若年層と地域との関わりをどのようにつくっていくかが課題であると報告された（三井情報開発株式会社総合研究所、2004）。

以上の調査から若年者のボランティア意識が低いわけではなく、地域へのつながりを確保することの必要性があるといえる。そこで、地域でのボランティア活動の機会を確保するために大学が可能な対応として、東日本大震災を機に、2012年度に学部科目としてボランティア活動論を新設した。シラバスの授業概要では「地域・社会貢献に対する学生のボランティア活動が推奨されていること」、「ボランティア活動の活性化を促すために、学生が主体的に計画し、参加した、一定の基準を満たすボランティア活動に対して単位を認定すること」と説明した。

授業の目的は、「学内での講義はボランティアを行うための基礎的な知識を学習するにとどめ、そのガイダンスをもとに、学外実地でのアウトリーチを主体的に実施することを学習活動の中心とする。これにより、人間関係の相互性、自立性を確認し、相互発展的な関係を築き、自らが保護的、支援的存在であることを確かめることを目的とする」こととした。

またその到達目標と大学のディプロマ・ポリシーとの対応は、次の通りである。

1. 「ボランティア活動の主体となる人間の存在と相互関係について理解できる。」は、b: 知識・理解に対応する。
2. 「利他的行動と自己愛的行動を明確化できる。」は、d: 倫理観・社会的責任に対応する。
3. 「自然災害と支援の相互発展的過程を理解できる。」は、d: 倫理観・社会的責任に対応する。

4. 「自然と人間の調和的關係とコミュニティーの形成過程を理解できる。」は、e: 地域理解に対応する。

5. 「人間の愛と尊厳について洞察できる。」は、d: 倫理観・社会的責任に対応する。

その成績評価の基準としては、次の通りとした。

(1). 支援を求める人々のニーズを理解し、自分にできる支援の可能性を説明できる。

(2). 自分の支援的役割を明らかにし、関連する人々との連携方法を説明できる。

(3). 自分の能力の限界を知り、安全に活動できる計画を立て、評価できる。

(4). ボランティア活動によって得られた新たな価値について説明できる。

(5). 「生きる」を支えるものとは何か、について自分の意見を明らかにできる。

これに対する学生自身の自己評価を参考に、「了」の客観評価を与えるものとした。

具体的な授業としては、第1回に「ボランティア活動のガイダンス」を担当教員が行い、第2回は学生自身がボランティア活動の計画書の作成を行って担当教員に提出し、第3回～第6回まで「ボランティア活動の実際」を行う。第7回では、レポートの作成を行い、第8回を評価日とする。

これらの学習活動に対する自己学習へのアドバイスとしては、第1回には、自分の希望するボランティア活動を見いだしておくこととし、第2回は、ボランティアとしてどのような支援役割ができるかを明らかにし事前調査などの準備を行うこととする。第3回は、先方受け入れ先との打ち合わせを行い、健康管理を十分におこないつながりながら可能な範囲で準備を行う。第4～6回は、ボランティア活動を行う前に必要な物品を準備し、第7回は、参考書を用いて、期待されたことに対してできたことを振り返り、まとめることができることとしている。第8回は、自己評価を行うこととする。

この科目履修のために、2012年度からボランティア活動が可能な地域のフィールドとして学生に紹介されたものは、次のような活動であった。香川県教育委員会主催英語キャンプ、香川県国際交流協会主催の活動、各小中高等学校での学校保健等のボランティア活動、医学部国際交流委員会主催の短期留学生対応ボランティア、瀬戸内国際芸術祭ボランティア、災害地自治体・NPO等のボランティア、患者会（ALS香川県支部、病児保育など）関連ボランティア、香川大学男女共同参画推進室香大っ子サポーター等であった。

本授業は、社会のニーズによって課題が生じる特性から、履修登録の特例を定めている。つまり、年度初めの履修登録期間に登録が完了できていない場合でも、担当教員の指導のもとでフィールドワークをまとめ、かつ単位認定を希望する場合は、履修登録および単位取得ができる。登録方法についても担当教員に連絡をとることとして、柔軟な履修対応を行っている。

また、学生の自主活動であることから、履修上の留意として、「ボランティアに参加する際、健康上および経済的問題がないこと、学生保険に加入する必要があること、必要に応じて、予防接種の有無を確認すること」としている。

これまでのボランティア活動は、養護教諭養成課程に在籍する学生が、教職にむけて、

健康診断や保健活動のボランティア活動が多かった。また平成30年の西日本大水害による医療ボランティアも既報だが、近年は患者会と連携したボランティア活動が実施されている。しかし、令和2年度からのSARS-Cov-2感染症のために対面活動が制限されているため、社会状況の変化にあわせて活動も工夫が必要となった。

本研究では、COVID-19パンデミック下における活動の工夫とこれらボランティア活動による、看護学生の社会貢献意識に関する内的態度構造を実証的に検討し、その教育効果を明らかにすることを目的とする。

2. 目的

本研究の目的は、COVID-19パンデミック下における看護学生の在宅療養筋委縮性側索硬化症(ALS)患者(以下、ALS在宅療養者)へのボランティア活動の工夫とこれらボランティア活動による看護学生の社会貢献意識に関する内的態度構造を実証的に検討し、その教育効果を明らかにすることを目的とした。

3. 方法

3-1. 研究デザイン

研究デザインは、仮説検証型研究である。ALS在宅療養者への支援活動に参加した学生の所感を調査1とし、調査2はこれらの学生を含む看護学生への質問紙調査とした。

3-2. 対象者

対象者は、学部看護学生(以下、学生)3年生から4年生であった。そのうち調査1は29名が参加し、調査2における欠損値を除いた有効回答者数は、70名(回収率93%)であった。基本属性は、平均年齢21.14(SD±0.78)歳、性別は、男性2名、女性72名、1年以内のボランティア経験者は16名であった。

3-3. 介入条件

ALS在宅療養者への支援活動は、2018年度にボランティアサークルメンバーにより開始された。2018年度のメンバーの活動内容は、ALS在宅療養者へのニーズ調査、学生ボランティアの活動展開の調整、在宅療養者宅での誕生会であった。

2019年度のメンバーの活動内容は、ALS在宅療養者宅への訪問、在宅療養者のショッピングモールへのショッピングや遍路巡礼への外出同行介護、患者会主催茶話会へ参加などであった。その後、2020年度、2021年度はCOVID-19禍においてのリモートミーティングへの参加を行った。

3-4. 測定用具

調査2の測定用具は質問紙であった。この質問紙は、ボランティア活動に参加した経験

のある学生および今後参加する予定の学生を対象として実施された。質問項目は、ボランティア活動を行う際に、学生がどのような社会貢献意識を有し、態度形成に関連しうるかの調査を行うために作成された。

本調査で用いる質問項目は、次のように作成された。質問項目候補は、2019年度から2020年度のALS在宅療養者と家族へのボランティア活動に参加した学生29名の匿名化された所感を原資とした。この所感のテキストデータから、質問項目を作成した。ボランティア活動の所感とは、ボランティアに参加した看護学生がサークル顧問とボランティアメンバーに報告した活動後の感想を記した記録である。

項目の具体的な作成過程は次の通りであった。初めに、ボランティア活動記録のテキストデータをExcel表の一行に一文ずつ取り込んだ。次に一文を文節に切片化し、さらに、文節を10字前後の長さにした。10文字前後の文から、「看護学生のボランティア活動を通しての考えや思い」が記述されている文のみを抽出した。最後に、類似の文や読解を要する文を除き、30文を質問項目とした。「看護学生のボランティア活動を通しての考えや思い」の30項目を「列」とし、社会貢献2項目「人々の安寧のために力を尽くす」、「世の中が良くなるために力を尽くす」を「行」として、2次元の対になる調査用紙を作成した。この基準となる項目を列と行に配置し、7件法の一対比較法で回答者に評定を依頼した。

評定段階は、「非常に遠い」「かなり遠い」「やや遠い」「どちらともいえない」「やや近い」「かなり近い」「非常に近い」でそれぞれに1から7の評点を対応させた。

質問項目妥当性の検討は、類似する内容の先行研究の調査内容と照合させ、研究メンバーで検討を行った。

3-5. データの収集方法

データは、質問紙調査により収集された。

質問紙調査は、研究責任者が、授業時間外に書面と口頭で調査の趣旨を説明し、同意書により同意をえた者にのみ回答を依頼した。質問紙の回収は、大学内に回収箱を設置して行った。

3-6. 分析方法

「調査」の参加者の所感記録は記述的に分析した。

調査2質問紙調査の分析方法は、ウォード法によるクラスター分析であった。基本属性は、単純集計を行い、年齢とボランティア活動の回数は記述統計を行った。統計ソフトはIBM-SPSS Statistics ver.26であった。分析方法の妥当性および結果の解釈は研究者間で検討を行いながら進めた。

3-7. 倫理的配慮

質問紙調査は、香川大学医学部倫理委員会の受審を行い、承認を得て実施した（承認番

号 2021-010)。質問紙調査は匿名で行われ、個人が特定される項目はなかった。

4. 結果

4-1. ボランティア参加の所感記録

(1) 訪問ボランティア（学生）

- ①今回、初めて ALS 患者さんとお話しして、言葉だけではなく表情からも多くの情報を受け取ることができると実感しました。文字盤を使用した会話では、患者さんが私に伝えようとしていることは何かを考えながら会話することが、とても貴重な時間だったと思いました。患者さんの顔を見ながらお話しすると、笑顔になるときもあり表情が豊かで、改めてコミュニケーションにはさまざまな形があるのだと感じました。また、患者さんの奥さんが「2人で話すこともあまりないので、夫が今回のボランティアでお話しできる機会が作れることはとても嬉しい」と言われていたことがとても印象に残っています。患者さんとお話しすることだけでも、患者さんにとって有意義な時間を過ごしていただけるのだとわかりました。これから始まるボランティア活動内でも、患者さんとお話しする時間を大切にしたいと思います。
- ②私は今回の訪問ボランティアの挨拶で、初めて ALS の患者さんとお会いしました。今までインターネットやテレビ等で ALS の患者さんをみたことはありましたが、実際に会ってみると自分の想像をはるかにこえた患者さんのバイタリティにとっても感動しました。また、顔の動く筋肉を使って自分の気持ちを伝えるツールがあったり、文字盤を通してコミュニケーションを行ったりすることができ、面と向かった会話以上に、精神的な面においても患者さんと密にコミュニケーションをとることができると感じました。さらに、文字だけではなく表情や少しの仕草でもなんとなく患者さんが伝えたいことがわかるような気がしました。患者さんのことを理解しようとする態度がとても大切なことだと実感しました。また「他の患者さんが人工呼吸器を最後まで付けなかった」というお話を聞いて、患者さんの意思を尊重することと医療者として命を守る行為をすることのジレンマの中で、どのようにして患者さんが納得し生きやすい環境を作るかがとても難しい問題だと思いました。これからボランティアの機会を通して患者さんのニーズに着目しながら、本当に必要なことは何か考えていきたいです。
- ③私は今回、在宅で療養されている ALS の方にご挨拶に行き、どのような状況のなかで療養されているのかを知ることができました。私たちは普段、会話でコミュニケーションをとっていますが、表情や空気を読み取って会話することの大切さを患者さんから学ぶことができました。文字盤でなかなか気持ちを伝えることのできないもどかしさはあると思いますが、そのなかで自分の気持ちを伝えることをやめずに向き合い、またご家族も向き合おうとしているということがわかりました。ボランティアに取り組むにあたって、患者さんのことはもちろんですが、家族の思いも考えることができるようになりたいと思いました。今回、私は文字盤で会話をするすることができませんでしたが、文字盤で

会話ができるように練習して次回から望みたいと思います。

(2) リモートボランティア

①学生の所感は次の通りであった。

活動そのものがたのしめた、やりがいが生まれた、人や地域に貢献しようという気持ちが芽生えた、日常生活の中で人との対応が好ましい方向に変わった、新しい出会いがあり人間関係の輪が広がった、気持ちの充足感が生まれたなどの感想があった。また、今後は、もっとお話がしたいです。画面共有して季節の写真とかみせてあげることができたらいいと思った。クイズをしたいと思った。

実施後に対象者とメールにてリフレクションを行った。

4-2. 態度構造分析の結果

クラスター分析の結果、図1に示すように9クラスターが形成された。クラスターのラベルは、「社会的連帯の実現」、「支援的役割の明確化」、「人間関係の相互性」、「コミュニケーション」、「支援を求める人々のニーズを理解」「看護職としての専門性の向上」、「自分の能力を人の役に立てる」、「愛他的精神の高まり」、「自分の能力の限界を知る」の9つであった。

クラスター1は項目19「連携や横の繋がり的重要性」、20「密接な連携や精神的支援が必要」、17「家族の思いも考えることができるようになりたい」、18「家族の精神的支援の重要性」、14「有意義な時間を過ごしていただける」の4項目であり、「社会的連帯の実現」と命名された。

クラスター2は項目14「有意義な時間を過ごしていただける」、28「本当に必要なことは何か考えたい」の2項目であり、「支援的役割の明確化」と命名された。

クラスター3は項目9「お互いがお互いを尊重」、15「お話しする時間を大切にしたい」、11「本当に素敵な関係を持たれている」、8「療養者さんの優しさとそれを支える周りの優しさ」の4項目であり、「人間関係の相互性」と命名された。

クラスター4は項目22「表情や空気を読み取って会話する」、25「表情からも多くの情報を受け取ることができる」、24「密にコミュニケーションをとる」、21「全体を見てコミュニケーションを行う」、23「自分の気持ちを伝えることをやめずに向き合う」の5項目であり、「コミュニケーション」と命名された。

クラスター5は項目29「ニーズに着目する」、30「理解しようとする態度」、10「思いやる気持ちがとても強い」の3項目であり、「支援を求める人々のニーズの理解」と命名された。

クラスター6は項目16「家族、訪問看護師などが協力してサポート」、26「ケアの内容や精度を充実したものにする」、27「積極的にお手伝いしていけるようになりたい」の3項目であり、「看護職としての専門性の向上」と命名された。

クラスター7は項目5「学んだこと、感じたことをどのように改善していけばよいか」、6「自分の能力を上げることができるか考え生かしていきたい」の2項目であり、「自分の

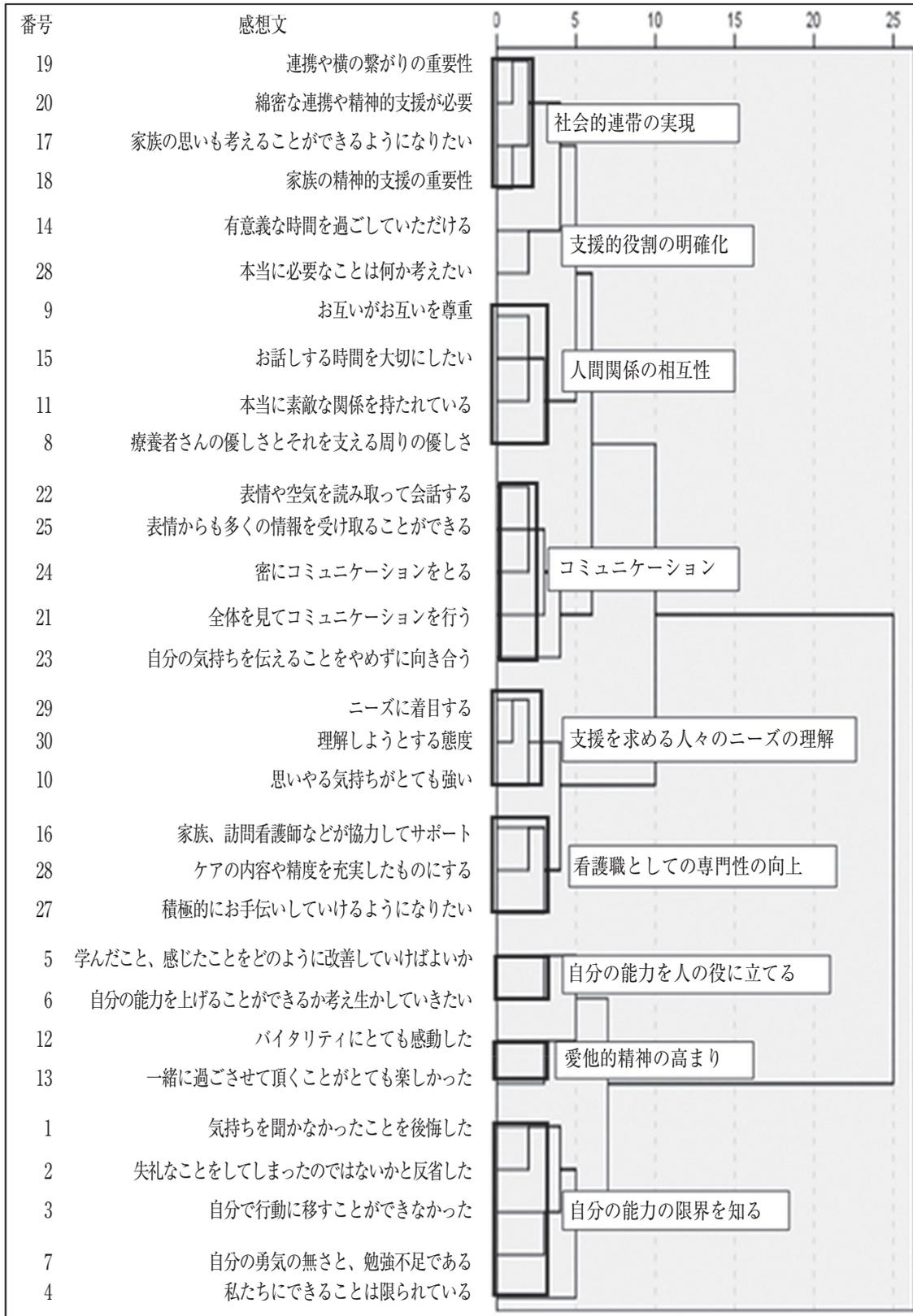


図1 看護学生の社会貢献意識調査結果のデンドログラム

能力を人の役に立てる」と命名された。

クラスター 8 は項目 12 「バイタリティにとっても感動した」、13 「一緒に過ごさせていくことがとても楽しかった」の 2 項目であり、「愛他的精神の高まり」と命名された。

クラスター 9 は項目 1 「気持ちを聞かなかったことを後悔した」、2 「失礼なことをしてしまったのではないかと反省した」、3 「自分で行動に移すことができなかった」、7 「自分の勇気のなさ、勉強不足である」、4 「私たちにできることは限られている」の 5 項目であり、「自分の能力の限界を知る」と命名された。

5. 考察

5-1. ボランティア活動の実際について

(1) 在宅訪問ボランティアに参加した学生もリモート交流ボランティアに参加した学生も、ボランティア活動の内容は異なるがやりがいや充実感を感じていた。科目担当者からボランティア開始前に、ガイダンスを行うことで、学生は目的意識を明確化し、ボランティア活動の内容は異なっても一定のやりがいや充実感を得ることができた可能性がある。

(2) 在宅訪問ボランティアの学生は、ALS 在宅療養者と自分との関係を一対一の関係ととらえていた。一方で、リモート交流ボランティアの学生は、オンライン上で一度に複数人と対面する形式であるため、多数者と同時に交流することができ、対集団との関係ととらえていた。これは、ボランティア活動に参加した人数や対話的關係の範囲をどのように認識したかが影響したものと考えられる。訪問し、ベッドサイドで ALS 在宅療養者と対話する際には、話し相手との対面的関係が明確である。しかし、リモートでは、話し相手の他に多くのメンバーが画面に映っている場合、対面的関係においてより、多くの視線を感じやすい可能性がある。一方で、リモート対話は、傍観的立場もとることができるため、気軽な参加が可能になる可能性もある。

(3) 学生は、ボランティア活動実施後のフィードバックをメールで対象者と交換しリフレクションを行った。この意見の交換により、ボランティア活動での学習成果や課題を明確にすることができ、活動内容の質が向上すると期待できる。ボランティア活動の質を向上させることは、ALS 在宅療養者への充実した支援につながるのみならず、学生の自己実現への欲求や社会参加意欲の充足につながるといえる。その結果、社会貢献や福祉活動への関心が高まると考えられる。

5-2. クラスターの解釈

看護学生は、社会貢献意識として、「社会的連帯の実現」、「支援的役割の明確化」、「人間関係の相互性」、「コミュニケーション」、「支援を求める人々のニーズの理解」「看護職としての専門性の向上」、「自分の能力を人の役に立てる」、「愛他的精神の高まり」、「自分の能力の限界を知る」を有していることが明らかになった。

クラスター 1 「社会的連帯の実現」では、「連携や横のつながりの重要性」が最初の項目

であった。また、看護学生は、ALS 在宅療養者やその家族の「精神的支援」や「思いを考える」ことが必要であると考えた。つまり、看護学生は、周囲の人々との互いに同じ目的に向かい協力して物事を進めることの重要性を感じていた。これは、ボランティア活動の性格である「社会性（連帯性）」と一致すると考えられる。猿渡（2015、45 頁）によると、豊かな連帯が社会集団への愛着を強くし、社会集団への愛着が強い人ほど自発的に公共活動に参加するようになる。ボランティア活動に参加した学生は、ALS 在宅療養者やその家族だけでなく、ともに ALS 在宅療養者を支援する医療スタッフなど様々な立場の人々に出会うため、その人々との輪の中に取り込まれた連帯感を意識したものと考えられる。したがって、ボランティア活動を行う看護学生の社会貢献への意識は、支援対象者にとどまらず、支援対象者を取り巻く複数人と関係を構築し、取り巻く人々と共に一つの目的に向かって活動し、社会的課題に取り組むことに関連したものといえる。

クラスター 2「支援的役割の明確化」では、ボランティア活動に参加した学生は、ボランティア活動における限られた活動範囲の中で、ALS 在宅療養者や家族に「有意義な時間をすごしていただく」ように誕生会の開催のような支援内容を計画していた。また、有意義な時間となるために、ALS 在宅療養者や家族に対して「本当に必要なことは何か」を検討していた。このことは、ボランティア活動の到達目標であるため、「自分の支援的役割を明確にする」ことへの到達とみることができ、到達可能な目標設定であったといえる。したがって、看護学生は、ボランティア活動を社会学習の場と考えているだけでなく、支援者として役割を担い活動することを念頭にしつつ参加していたと考えられる。

クラスター 3「人間関係の相互性」では、ボランティア活動に参加した学生は、「お互いがお互いを尊重」することや「お話する時間を大切に」することを意識していた。互いに尊敬することや話す時間を持つことは、交流の喜びを実感し「素敵な関係性を持つ」ことができる。一般的に人間関係の形成と進展は、親密化過程とよばれ、「当事者間の自己開示の交換を通して徐々に明らかにし合った互いの類似・異質点に基づき、特定の役割行動を遂行するよう期待し合い、当事者間の相互依存レベルを高め影響力を増していく過程（下斗米、2000、2 頁；下斗米、1994、52-67 頁；1999、100-121 頁）」である。したがって、ボランティア活動を行う看護学生の社会貢献の意識には、人間関係の形成において、相互理解と役割遂行を期待し親密な関係を構築することが関連している。

クラスター 4「コミュニケーション」では、ボランティア活動に参加した学生は、ALS 在宅療養者の状態を考慮しながらも、対話姿勢を持ち続け、所感では「表情や空気を読み取って会話」し、「表情からも情報を受け取る」、「全体を見てコミュニケーションを行う」と表現されるように「密にコミュニケーションをとる」様子が記述されている。ALS の疾患は、神経や筋肉が麻痺し、構音障害が生じる。学生らが対話した ALS 在宅療養者は人工呼吸器を装着しており、その対話は家族が文字盤を用いて ALS 在宅療養者の言説を受け取り、家族の言葉が代弁する形で学生に伝えられる。また人工呼吸器を装着した ALS 在宅療養者の表情は乏しく、ボディーメッセージも表現されない。そこで看護学生は、ALS 在宅

療養者のわずかに動く目などの表情、家族の反応などを手掛かりとして ALS 在宅療養者の言説を想像しながら理解する、との意味を含んでいると考えられる。つまり、ボランティア活動を行う看護学生の社会貢献への意識は、健康な人々からは得られないコミュニケーションの特徴が関連している。

クラスター 5「支援を求める人々のニーズの理解」では、ボランティア活動において療養者やその家族の「ニーズに着目」し、ニーズを充たすボランティア活動の展開を考えた所感が記述された。ボランティア活動に参加した学生は、ALS 在宅療養者のニーズを見出すべく「理解しようとする態度」を示す必要性を感じ「(ALS 在宅療養者を支える人々が)思いやる気持ちがとても強い」という印象を抱いていた。看護学では、看護が人々の生活を援助する機能を有するとしていることから、対象を包括的に捉える必要がある。そのため、学部教育の初期の段階から対象のニーズを明確にする訓練を受けている（大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会、2017）。したがって、ボランティア活動を行う看護学生の社会貢献への意識は、既習のスキルを活かして、支援を求める人々のニーズを考え、理解することに関連する。

クラスター 6「看護職としての専門性の向上」は、ボランティア活動に参加した学生が活動でのケアの内容や熟練度を向上させ「充実したもの」をめざしたものと考えられる。また、学生は、ALS 在宅療養者が安心して快適に過ごせるように、家族や訪問看護師と共に「協力してサポート」できるよう、「積極的にお手伝いしていけるようになる」との考えが記述されていた。このことは、看護の対象が、あらゆる年代の個人、家族、集団、地域社会である前提のもとで、看護職らしく振る舞い、看護職であれば、という思考を働かせていると考えられる。

クラスター 7「自分の能力を人の役に立てる」では、ボランティア活動に参加した学生は、ボランティア活動後に参加メンバーでの内省を行い、また ALS 在宅療養者からのフィードバックも受けて、「どのように改善していけばよいか」、今以上に「自分の能力を上げることができるのか」という問いを記述していた。看護学生は、「看護過程」つまり、情報収集の後のアセスメント、ケア計画、ケアの実施と評価、および修正のプロセスを学んでいる。このことから、「改善」はつまり修正を、「自分の能力をあげる」はコンピテンシーについて内省を深めたものと考えられる。ボランティア活動を行う看護学生の社会貢献の意識には、人の役に立つために自分の能力を内省することが関連している。

クラスター 8「愛他的精神の高まり」では、ボランティア活動に参加した学生は、ALS 在宅療養者への訪問ボランティアに参加したことによって、「(人工呼吸器を装着しながらも ALS 在宅療養者の) バイタリティにとっても感動した」と座学では理解することがなかった地域での体験を記述した。また、「(地域で生活する ALS 在宅療養者と支える人々と共に)一緒に過ごすことがとても楽しかった」と地域の人々とのかかわりを「充実した時間」としてとらえていた。それは学生が、人工呼吸器装着という困難な状況下でも、日々の生活を営んでいる ALS 在宅療養者の存在をしり、その存在に出会うことで、共感を抱いた可能

性がある。野村らはボランティア活動を経験している看護学生は、共感性や愛他心などの対人対応が高い（野村・小出水・西垣他、2015、36-44頁）と述べており、共感しやすい学生であった可能性がある。したがって、ボランティア活動を行う看護学生の社会貢献の意識には、他者の尊厳や幸福を考える愛他的精神を高めることが関連している。

クラスター9「自分の能力の限界を知る」では、ボランティア活動に参加した学生が、ボランティア活動の中で「気持ちをきかなかつたことを後悔した」、「失礼なことをしてしまったのではないかと反省」、「自分で行動に移すことができなかつた」、「勇気のなさ」と勉強不足などと現時点での自らの能力に疑問を呈し、課題を見出した記述があつた。また、「私たちにできることは限られている」と学生の身分ゆえに経験不足や知識不足があることをふまえて、自らの限界を理解していた。対象のALS在宅療養者は、人工呼吸器を装着して日常生活をおくっている。ボランティアに参加した殆どの学生は人工呼吸器を装着したALS在宅療養者の看護経験がなかつた。つまり、ボランティア活動を行う看護学生の社会貢献の意識には、高度な看護が要求される場面での反応も関連するといえる。

5-3. クラスターの総合的解釈

クラスター1からクラスター9の相互の関連も含め、学生のボランティア活動における社会貢献意識について総合的に解釈する。本研究で取り上げた大学の「ボランティア活動」の授業目的は、人間関係の相互性、自律性を確認し、相互発展的な関係を築き、自らが保護的、支援的存在であることを確かめることである。学生がボランティア活動の機会を通して得た所感の代表性を有するクラスター1からクラスター9は、ボランティア活動の授業目的に、整合するものであつた。つまり学生は、このクラスターに集約されたようにボランティア活動の目標に到達したといえる。Lewin, K (1951, 131-167頁)によれば、情緒的な連帯感は、「われわれ意識」をもたらし、集団の一員として認知され、社会的アイデンティティを確立させる。ALS在宅療養者と彼らを取り巻く人々は、ボランティアの学生メンバーを受け入れ、ともに語り合うことで情緒的連帯感を与えた可能性がある。その情緒的な連帯感によって、地域社会の一員として認知され、社会的アイデンティティを獲得する機会になったものと考えられる。つまり、ボランティア活動は、社会的アイデンティティの獲得という個人の発達にも影響を与えていた。

6. 結論

COVID-19パンデミック下における学生によるALS在宅療養者へのボランティア活動は、訪問型支援からオンライン支援に変化した。これらボランティア活動において学生の内的態度構造の実証的検討からみえた社会貢献意識は、カテゴリー名に代表されるような「市民として必要な知的技能と概念の発達」や「社会人としての自覚と責任、それに基づいた適切な行動」という青年期の発達課題に要約された (Havighurst, R. J. 1953)。このこ

とは、やがて壮年期の発達課題である「市民的責任の獲得」をもたらすことが期待できる。発達課題は、前段階での課題解決が、次の段階での健全な課題解決の基盤となる。特に疾風怒濤の発達段階といえる青年期には、社会とのかかわりが一層重要な課題である。家庭生活を営み、就業する課題を有する、次の成人期への準備として、青年期における社会的アイデンティティの獲得は意義深いものである。このようにボランティア活動は社会的発達を動機づける有用な機会になったといえる。

謝辞

ボランティア活動においては、日本 ALS 協会香川県支部および支部に所属する在宅療養者の方々にご支援をいただきましたことに感謝を申し上げます。

COI

本研究において特定企業との利益相反はありません。

参考文献

- 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会（2017）『看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標』（https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf）＜2021年10月19日アクセス＞
- 独立行政法人国立青少年教育振興機構（2020）『大学生のボランティア活動等に関する調査』（https://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/142/）＜2021年10月19日アクセス＞
- Havighurst, R. J. (1953) *Developmental Tasks and Education*, New York: McKay, 『臨床心理学用語事典』（<http://rinnsyou.com/>）＜2021年10月27日アクセス＞
- Lewin, K. (1956) *Field theory in socialscience*. (猪股佐登留訳) (1979) 『社会科学における場の理論』誠信書房。
- 南出康世編（2018）『ジーニアス英和辞典（第5版）』大修館書店。
- 三井情報開発株式会社総合研究所（2004）「ボランティア活動に対する国民の意識の概況」『平成15年度文部科学省委託調査「奉仕活動・体験活動の推進方策等に関する調査研究」ボランティア活動を推進する社会的気運醸成に関する調査研究報告書』（https://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/houshi/detail/1369080.htm）＜2021年10月19日アクセス＞
- 野村光江・小出水寿英・西垣里志・菅佐和子（2015）「看護学生の情動知能の発達—性格特性との関連—」『関西看護医療大学紀要』7（1）、36-44頁。
- 小倉啓宏（2013）『看護学大辞典（第6版）』メヂカルフレンド社。
- 佐藤憲正（2001）『日本国語大辞典（第二版）』第11巻、小学館。

猿渡壮 (2015) 「ボランティア活動への参加をもたらすもの」『同支社大学社会学会』114、45 頁。

下斗米淳 (2000) 「友人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究—役割期待と遂行とのズレからの検討：役割期待と遂行とのズレからの検討」『実験社会心理学研究』40(1)、2 頁。

下斗米淳 (1994) 「対人魅力と職場集団の機能」齋藤勇・藤森立男 (編) 『経営産業心理学パースペクティブ』誠信書房、52-67 頁。

下斗米淳 (1999) 「対人関係と魅力」吉田俊和・松原敏浩 (編) 『社会心理学：個人と集団の理解』ナカニシヤ出版、100-121 頁。

暉峻淑子 (2012) 『社会人としての生き方』岩波新書。

和田攻・南裕子・小峰光博 (2010) 『看護大事典 (第2版)』医学書院。